

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16162

研究課題名(和文)「人」を貸し出す「図書館」の理念と実践に関する研究

研究課題名(英文)Research on the theory and practice of "human libraries"

研究代表者

照山 絢子(Teruyama, Junko)

筑波大学・図書館情報メディア系・助教

研究者番号：10745590

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、さまざまなマイノリティや社会的弱者への差別や偏見を低減することを目指す、「ヒューマンライブラリー」という対話の催しについて質的調査を行った。ヒューマンライブラリーはデンマーク発祥で現在は国際的な広がりを見せているが、特に日本国内における実践の手法とその背景にある考え方について明らかにするとともに、この催しを定着させていくために考慮しなければならない社会的・文化的要因などについて分析をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ジェンダー、民族、宗教、階層、病気や障害の有無等、私たちの社会にはさまざまな多様性を持つ人々が暮らしているが、こうした人々が生きづらいつ感じるのは、一般社会を構成している人々の理解の欠如、想像力の欠如が大きな要因だと言える。そうした状況に一石を投じるための「出会いの仕掛け」「対話の仕掛け」として、ヒューマンライブラリーは実験的かつ画期的な試みである。こうした仕掛けの考え方や実践の仕方について研究を進め、理解を深めていくことは、私たちの社会がより多様性に対する配慮を持ち、すべての人にとって生きやすい社会となっていくための一助となる。

研究成果の概要(英文)：The researcher conducted qualitative research on "human libraries." Human libraries are events that foster a space for dialogue with the aim of challenging prejudice and social stigma towards minority populations. The event was first held in Denmark and is hosted in locations worldwide. In this project, the researcher focused on human libraries held in Japan and examined the practices and ideas behind the events, revealing how sociocultural elements must be taken into consideration in establishing human libraries in diverse locations.

研究分野：文化人類学

キーワード：対話 マイノリティ 差別 偏見

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「ヒューマンライブラリー」(以下 HL と記す)とは、2000 年にデンマークで始められた催しで、障害者や移民、性的マイノリティ等さまざまなバックグラウンドを持つ人を「生きている本」として貸し出し、30 分から 1 時間程度の対話を通して聞き手(読み手)の先入観を覆し、差別や偏見につながる考え方を低減することを目指す、社会変革的な志向性を持った実践である。公立図書館のイベントや音楽フェスティバルの催しの一環として、以後日本をはじめ世界各地で開催されている。

HL については、国内外の実践報告はいくつか発表・出版されているが、学術的な研究についてはほとんどなされてこなかった。本研究は特に日本国内における HL に焦点をあてながら、この催しの理念と実践をフィールドワークを通して明らかにしようとしたものである。

2. 研究の目的

HL は世界のさまざまな国や地域に広がりを見せているが、それぞれの社会的・文化的背景を鑑みた多様なローカライゼーションの過程が見られる。デンマークには Human Library Organization という、世界的な HL の拠点的組織とも呼べるものがあるが、各国の HL を実質的に統括・認可・支援するような性質のものというよりは、HL 発祥の地にある象徴的存在に留まるため、HL の開催形態等はほぼ全面的に各主催者に委ねられているといえる。

こうした状況を踏まえ本研究では、日本国内における HL が、どのような運営体によって、どのように司書(スタッフ)、本(語り手)、読者(読み手)の関わりを呼び込み、どういった配慮をしながら運営されているのか等を明らかにすることで、国内において対話を通してマイノリティをめぐる啓発を推進していく方法論について検討することを目的とした。

3. 研究の方法

調査者の専門領域である文化人類学におけるフィールドワークの手法をとって研究をすすめた。具体的には、平成 28 年度から 4 か年にわたって、国内の HL における参与観察調査を実施するとともに、主催者ら 9 名、本(語り手)23 名への半構造化インタビューをおこなった。また、司書(スタッフ)などとして実際に活動に関わる形でのフィールドワークも複数回実施した。さらに、国内の HL 活動を取りまとめる団体として、日本ヒューマンライブラリー学会が設立される際、その立ち上げから関わり、国内の主催者等関係者らとラポールを形成して、研究の成果発信や情報交換を含む調査活動を行った。

インタビュー形式で収集したデータは録音して文字起こしを行い、フィールドノートの形で記録した参与観察データや、フィールドワークの過程で入手した資料などと合わせて質的資料としてコーディングを行って分析をした。

4. 研究成果

(1) 「本」にとっての HL 参加の意義

本研究の成果の一つとして挙げられるのは、本(語り手)にとっての HL 参加の動機と意味付けを明らかにしたことである。HL に参加するにあたり、本は 4 つの段階で自己の内省を行っており、そうした段階的な振り返りが自身の自己物語を構築していく上で重要な役割を果たしていることがわかった。デンマークをはじめとする海外の HL の中には、本の「トレーニング」を通して明示的に自己物語を確立させ、マイノリティとしてのアイデンティティ構築を目指す実践が見られるが、国内においてこうしたことを行っている HL は調査の範囲ではなかったものの、個人的なレベルで対話と内省を通じた成長の語りが見られた。これは、読者に対する啓発を第一義とする HL にとって、今まで明らかになってこなかった側面である。

(2) 主催者の抱えるリスク

一方で、主催者へのインタビューから明らかになったのは、HL の社会的な意義を認めつつも開催にあたって多くの葛藤や不安を抱えているという実態である。とりわけ重要な点となっているのは、さまざまな差別や排除を経験してきた痛みを抱える本の方々が安心して自己開示ができる場を確保することの困難であった。それらは大別すると、(A)本と読者の対話の中で発生しうる衝突・トラブルをいかに回避するか、(B)本が語ることが本自身の生活にネガティブな影響を及ぼさないよう、プライバシーをどのように確保するか、(C)HL という催しやその形態そのものが、不要に差異を強調したり、本に社会的スティグマを付与したり、「見世物小屋」的な色彩を持ってしまふことをどのように回避するか、(D)主催者や主催団体を特定の政治的立場に与するものとした誹謗中傷にどのように対応するか、という 4 点に分類することができる。主催者らは、司書(スタッフ)の教育を徹底することや本自身の語りに向かうレディネスを確認することなどによってこうした問題に対応していたが、こうした葛藤や不安の現れ方は日本社会におけるマイノリティをめぐる言説や文化的素地とわかちがたく結びついており、HL のローカライゼーションということを考えていく上で重要な発見となった。

(3) 実施の形態等に関する国際比較

日本国内における HL の特性は上述の点に留まるものでない。本研究では、デンマークの HL について調査をおこなっている研究者と協働し、実施形態などに関するより細やかな比較分析も

試みた。その結果は以下の表に示す通りである。

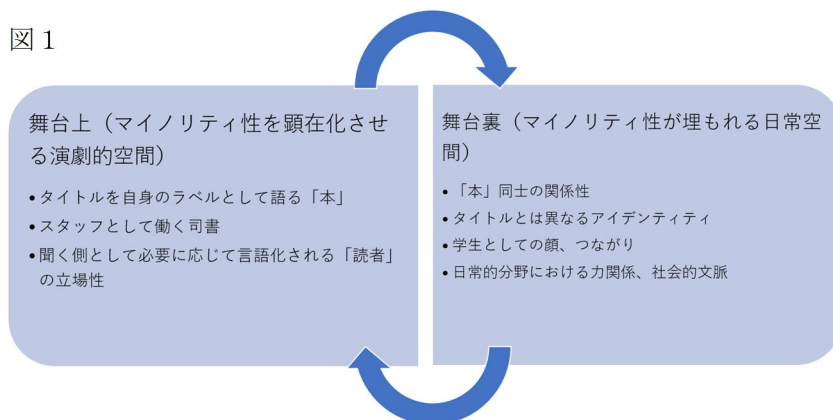
表 1

	デンマーク	日本
実施の主体	中核的組織が主催、共催で推進	大学、市民団体等がそれぞれ独立したかたちで主催
開催場所	公共図書館（公共型）、教育機関（カスタマイズ型・非公開）、団体の会議、催し（カスタマイズ型・非公開）、イベントフェス（公共型）	大学、市民団体、個人、民間教育機関等
主たる目的	差別・偏見を低減、撲滅のため。「カバー（ラベル）で判断するな」	読者が何を得るかについてはおおむね読者に委ねられているが、催しとしては多様性について学ぶ機会を提供するものとされる
本の種類、傾向、本の獲得方法	偏見を受けがちな人々 偏見を受けた経験の有無 個人が応募・申請、採用 中核的組織が本を所蔵し、都度都合の合う本を準備、提供	障害者と LGBT が大きな中核をなす 自助グループなどを介してのリクルート 主催者間における紹介などのゆるやかなつながりがあり、常連となっている本はあるが、非公式的
本の位置づけ、役割	偏見を低減させる主体 編集され出版される <ベストセラー>は表彰	自身のライフストーリーを共有する個人 本自身の語りたいことを尊重 傷つけてはならない対象
学びの主体の重き	読者 > 本 > 司書 ないし 読者・本 > 司書	読者のみならず、司書（大学開催の場合は学生）にとっての教育的意義に強い関心が寄せられている
あらすじ・カバーの演出・表現	ステレオタイプ、属性の強調	個人のキャラクターやライフストーリーの断片が垣間見える魅力的な「あらすじ」を提供 属性に集約されない物語
対話の仕掛け・対話の文化の有無	どこで対話をするのも自由、区切りはない、椅子やソファで対面し対話 有。合意形成、生活形式の 民主主義の社会	対話の文化を形成するための演劇的空間 綿密に計画され、構造化された空間構成
社会政策との関係	コペンハーゲン市の差別撲滅の施策として予算がつき、12校に派遣	草の根的運動 地域社会との緩やかなつながりは念頭におかれている
<図書館>の位置づけ、活用	対話のできる公共空間として実際の公共図書館の価値を高める。	メタファーとして、特定の語りを可能とする空間づくりに作用

(4)「図書館」というメタファーが創出する演劇的空間

HL は「人を貸し出す図書館」という表現で表されるように、単なるマイノリティとの対話の場ではなく、図書館のような手続きを経て人を貸し出してその人を読む、というメタファーの上に成り立つ、ごっこ遊びの要素を持つ。実際の運営上も、図書館で使われるような「貸出カード」が用意されたり、スタッフのことを「司書」と呼んだり、主催者は意図的にこのメタファーを活用している。本研究では、主に参与観察調査に基づいて、こうしたメタファーが特有の演劇的空間を創出し、一般社会の中ではなかなかできないような自己開示的な語りや対話を可能にしていることを明らかにしたことも、一つの成果といえる。

図 1



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 菅原早紀、照山絢子	4. 巻 48
2. 論文標題 ヒューマンライブラリーにおける対話と自己理解 繰り返し参加する「本」の語りから	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 異文化間教育	6. 最初と最後の頁 116-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤裕紀、照山 絢子	4. 巻 51
2. 論文標題 デンマークにおけるヒューマンライブラリーに関する分析 - 実施の形態と社会的背景に着目して-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 異文化間教育	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐藤裕紀; 照山 絢子
2. 発表標題 日本とデンマークにおける ヒューマンライブラリー実践の比較分析：社会的・文化的背景に着目して
3. 学会等名 異文化間教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 照山絢子
2. 発表標題 差異化と連帯のディスコース：発達障害とヒューマンライブラリーの研究から
3. 学会等名 東京大学大学院教育学研究科 バリアフリー教育開発研究センター、ダイバーシティ教育定例研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅原早紀
2. 発表標題 対話による自己理解を目指した実践と効果 -ヒューマンライブラリーにおける「本」の語りから
3. 学会等名 異文化間教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菅原早紀
2. 発表標題 ヒューマンライブラリーにおける対話と自己理解 ハーバーマスの『対話』理論のもとに
3. 学会等名 日本ヒューマンライブラリー学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Junko Teruyama
2. 発表標題 Raising awareness of minority issues in Japan - the ideas and practices of human libraries
3. 学会等名 Asian Association of Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 照山絢子
2. 発表標題 語りの場の『安全性』を問う： ヒューマンライブラリー主催者のインタビューから
3. 学会等名 日本ヒューマンライブラリー学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----